慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	心理と論理の間 : 美学の超越論的位置づけ
Sub Title	Between the psychic and the logical : orientation of the transcendental aesthetics
Author	大石, 昌史(Oishi, Masashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2014
Jtitle	哲學 No.132 (2014. 3) ,p.149- 189
JaLC DOI	
Abstract	In this paper I argue the relationship between epistemology and aesthetics, both of which are concerning the sensory (aesthetic) and the conceptual (logical). And I place the position of aesthetics transcendentally between the psychic and the logical, corresponding to the position of epistemology, but in the reverse direction. My study is divided into the following three parts. In the first part, Empirical Philosophy and Association, I introduce the empirical theory of ideas by John Locke and David Hume, especially about the genesis of ideas and their association. In the second part, Transcendental Philosophy and Empathy, I compare the cognitive judgment depending on the transcendental apperception by Immanuel Kant with the theory of general apperceptive empathy by Theodor Lipps. In the third part, Phenomenology and the Logic of Reversal, I compare the genetic phenomenology by the late Edmund Husserl with the dialectic logic by G.W.F. Hegel. Then I examine the correlative and reverse relationship between image and meaning in the dynamic process of the intentionality of consciousness. On the basis of these examinations, I conclude that aesthetics should include the following three kinds of interpretations of aesthetic objects: the inner impression of the outer object, the representation of the understood through a performance, and the symbol which synthesizes the sensory image and the conceptual meaning.
Notes	特集 : 論集 美学・ 芸術学 : 美・ 芸術・ 感性をめぐる知のスパイラル(旋回)
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000132-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

心理と論理の間

――美学の超越論的位置づけ――

大　石　昌　史*

Between the Psychic and the Logical: Orientation of the Transcendental Aesthetics

Masashi Oishi

In this paper I argue the relationship between epistemology and aesthetics, both of which are concerning the sensory (aesthetic) and the conceptual (logical). And I place the position of aesthetics transcendentally between the psychic and the logical, corresponding to the position of epistemology, but in the reverse direction.

My study is divided into the following three parts. In the first part, *Empirical Philosophy and Association*, I introduce the empirical theory of ideas by John Locke and David Hume, especially about the genesis of ideas and their association. In the second part, *Transcendental Philosophy and Empathy*, I compare the cognitive judgment depending on the transcendental apperception by Immanuel Kant with the theory of general apperceptive empathy by Theodor Lipps. In the third part, *Phenomenology and the Logic of Reversal*, I compare the genetic phenomenology by the late Edmund Husserl with the dialectic logic by G.W.F. Hegel. Then I examine the correlative and reverse relationship between image and meaning in the dynamic process of the intentionality of consciousness.

On the basis of these examinations, I conclude that aesthetics should include the following three kinds of interpretations of aesthetic objects: the inner impression of the outer object, the representation of the understood through a performance, and the symbol which synthesizes the sensory image and the conceptual meaning.

* 慶應義塾大学文学部教授

序　認識における心理と論理

a　心理主義と論理主義

フッサール Edmund Husserl は，彼の現象学的方法を初めて体系的な形で提示した『論理学研究 Logische Untersuchungen』第 I 巻「純粋論理学序説（プロレゴメナ）」（1900 年）において，当時の認識論もしくは経験論的哲学において隆盛であった「心理(学)主義」すなわち論理的思考を心理によって基礎づけようとする立場を批判し，経験を超えた「イデア的スペチエス［種概念］」としての「意味」に基づく独自の「純粋論理学」を主張している．しかし，このような心理主義批判は，同時にかつてのフッサール自身の立場に対する自己批判でもあった．認識における心理と論理との関係に対するフッサールの立場は，ブレンターノの影響の下に記述心理学の立場から数学（基数）の基礎づけを試みた初期の心理主義，それに続く，記述的現象学の方法を確立した『論理学研究』の時期の「論理(学)主義」，そして，志向的意識の解明に努めた『イデーン』に代表される超越論的・構成的現象学を経て，最晩年の発生的現象学の時期には，再び一種の心理主義的傾向へと回帰するといった形で，絶えず揺れ動いている．

以下の論考において，心理と論理は，検討する思想家の立場の相違に対応すべく，きわめて広い意味で捉えられている．心理は，経験的な意識主体における感覚，知覚，表象，感情，思考，等を含む時間的で不可逆的な心の現象の法則性を，論理は，意識主体を超えた無時間的で可逆的な概念間の関係性もしくは純粋化された思考の法則性を指す．そして，このような意味での心理と論理とが交錯する場として，認識ならびに美についての判断が，それを構成する諸契機とともに考察の対象となる．

b　認識の心理的基礎づけ

古代以来の存在論が様々な存在者が存在する原理（存在の論理）を問うのに対して，近代の認識論は，普遍的な認識を可能にする意識の働き方

（意識の論理）を問うものと規定できる．認識の論理的な普遍性は様々な学を可能ならしめるが，認識それ自体は，意識の経験的すなわち心理的な働き方を通じて現実的となる．それ故，思考や判断における意識の働き方を規制する論理学は，近代の認識論を基礎づけた経験論の立場を徹底するならば，思考や判断そのものを意識の現象として解明する心理学に依存し，その一部としてそれに吸収されることになる．しかし，それによって論理一般が心理現象へと還元されてしまうわけではなく，両者の錯綜した関係は，無時間的な論理が時間的な心理を通じていかに現象するかという形而上学的な課題を背負いながら，意識の働きに即して認識の可能性を問うカントからフッサールに至る超越論的哲学の根本的な課題として一貫して問われ続けている．

c　感性の論理

近代の美学は，帰納的推理に基づき認識を心理現象へと還元する経験論的哲学とは対照的に，演繹的推理に基づいて経験に先立つ思惟の原理を認める合理論の立場に立つバウムガルテン Alexander Gottlieb Baumgarten によって，真理に対する悟性の働き方と類比的に美に対する感性の働き方をとらえる「感性論 aesthetica」，すなわち悟性の論理学としての認識論と貶価的に対をなす感性の論理学（劣等的認識論）として誕生した．バウムガルテンによれば，美は，感性的認識，すなわち明晰ではあるが混雑した（不判明な）認識の完全性を示すのものである．しかし，このような感性の論理学としての美学は，経験論と合理論をともに批判し，独自の批判哲学を主張するカントによって，感性の領域にある美を悟性の領域にある完全性によって規定するものだと批判された．カントは，独自に規定した〈ästhetisch〉な判断において，「快・不快の感情」（心理）と「目的なき合目的性」（論理）を美に対する主観的ならびに対象的な規定として，超越論的に関係づけている．このようなカントの美意識論においても，心理と

論理は，単純に並存あるいは従属するのではなく，互いに動的・重層的に影響を及ぼし合う錯綜した関係にある．

d　本論の構成

本論考は，近代の認識論と美学における主要な学説の検討を通じて，意識と対象とが交錯する美的現象における心理と論理との錯綜した関係を，ともに時間の中で時間を超える（変化の中に変化しないものを見る）現象である認識と美との相違を意識しつつ，その動的・重層的な構造において解明しようとする試みである．また，それは同時に，論者が理解する感性論であると同時に美意識論であるところの美学について，それを構成する主要概念を通覧し，その概要を告知するものとなる．

第１節〈経験論哲学と観念連合〉では，ロックにおける外観（感覚）と内観（反省），単純観念と複合観念，観念の生成に関する規定を批判的に検討し，また，ヒュームにおける印象と観念，観念連合，信念と情動との関係，さらに，心理学的認識論および構造主義言語学における連合法則の展開をたどりながら，構造化された事象（文）の生成を通じて意識の内外を媒介する言語のあり方を，選択と結合による意識の運動，「相関」の論理と連関づけて論じる．

第２節〈超越論哲学と感情移入〉では，カントの認識論における綜合的判断，リップスの心理学における統覚的感情移入，それぞれの構造を，意識の統一作用，「包摂」の論理と連関づけて検討し，さらに，芸術美を例として，悟性と感性，論理的なものと感性的なものとが，同様な事象を意識の異なる次元から捉えた「多様の統一」（理解）と「統一の多様」（表現）として，並存的に綜合される関係ではなく，継起的に交代する関係にあることを指摘する．

第３節〈意識の現象学と反転の論理〉では，フッサール晩年の発生的現象学における前述語的な意識の受動的綜合の働き，主語と述語から成る命

題（判断）を可能にする対象化（客観化）と述語づけの規定を，ヘーゲルの弁証法論理における意識の諸段階，普遍・特殊・個別を貫く概念の自同性と対比し，それを踏まえて，志向的な意識によって相関づけられる像と意味との関係を，意識の自己超越的な運動に基づく「反転」関係として捉え直す．

以上のような考察を通じて，「感性の論理学」（感性論）であると同時に「美意識の心理学」（美意識論）であるところの美学が，意識と対象とが交錯する超越論的構造において，広義の解釈，すなわち情動と観念とが重層的に連結する印象解釈，理解と表現とを統一的に綜合する上演［演奏］解釈，像と意味とを反転的に接合する象徴解釈，これら三位相の「解釈を内包する美学」として結論づけられる．このような意味での美学は，単なる心理にも論理にも還元されることなく，意識の自己超越的な運動を通じて，同次元的には相関することのない「感性的なもの」と「論理的なもの」とを反転的に関係づけるものとして，心理と論理の「間」に超越論的に位置づけられる．

1　経験論哲学と観念連合

1.1　経験による認識の基礎づけ

a　外観と内観

ロック John Locke は，『人間知性論 An Essay concerning Human Understanding』（1690年，1705年［第5版］）において，デカルトにもなお認められていた「生得観念 innate idea」を否定し，人間の認識を，感覚を通じた「経験 experience」から基礎づけようとした．ロックは，いわゆる「タブラ・ラサ」（白紙）であったと考えられる「心 mind」が「観念 idea」を備えるようになる過程を，外観すなわち「感覚 sensation」と内観すなわち「反省 reflection」（内省）という二種の「観察 observation」を起源として，以下のように説明している．「外的で可感的な sensible 対

象について用いられるにせよ，私たち自身によって知覚 perceive し反省される心の内的作用について用いられるにせよ，観察が私たちの知性 understanding に思考 thinking のための全材料を供給するものである．これら二種の観察が知識の源泉であり，そこから私たちの持っている，あるいは自然に持つことのできるすべての観念が生じる」（『人間知性論』2.1.2, vol. 1 p. 77[1]）．「私は，知性の内にある観念は感覚と同時だと考えている．この感覚とは，知性の内に知覚を生み出すような，身体のある部分に生じた印象 impression あるいは運動 motion である」（2.1.23, vol. 1 p. 89）．「やがて心は，感覚によって得られた観念について自分自身の作用を反省するようになり，これによって反省の観念と私が呼ぶ新しい一連の観念を蓄える．これら［感覚による観念と反省による観念を生み出す働き］は，心の外にある外部対象が感官に与える印象と，心に本来備わっている固有の能力から発する心自身の作用であり，この作用も，心自身によって反省されると心の観想の対象となるのであり，すでに述べたとおり，知識の起原なのである」（2.1.24, vol. 1 p. 89）．

b　単純観念と複合観念

ロックの「観念 idea」の規定は曖昧であり，それには「心象 phantasm」（表象），「思念 notion」（概念），「種概念 species」（形相）といった，想像力を含む「知性」あるいは表象作用を含む「思考」の対象となるもののすべてが含まれる（『人間知性論』1.1.8, vol. 1 p. 9）．さらに，これらの観念は，それぞれの性質の違いを顧慮することなく，広義の「思考」の単位をなす「単純観念 simple idea」と，それらを部分として有する複雑な「複合観念 complex idea」とに分けられる．

単純観念には，感覚に由来するものと反省に由来するものとがある．これらはさらに，単一の「感官 sense」に由来する観念，複数の感官に由来する観念，反省のみによって得られる観念，感覚と反省の両方に由来する

観念に細分される．また，単純観念の諸性質は，「第一性質」（本源的性質）と「第二性質」（派生的性質）とに分けられる．第一性質とは，物体そのものに必然的に属しており，それなしには物体が存在することも考えることもできないような性質（堅固性，延長，形，運動と静止，数）であり（『人間知性論』2.8.9），第二性質とは，物体の知覚できない諸性質の結果として，我々のうちにある感覚（色，音，味，等）である（2.8.10）．

複合観念は，「様相 mode」「実体 substance」「関係 relation」に分類される．「様相」の観念として，「空間」（延長，距離）（『人間知性論』2.13），「時間」（継起，持続）と「永遠」（2.14），「数」（2.16），「無限」（2.17），「力」（能動，受動）（2.21），「思考」（2.19），「快苦」（情緒）（2.20），等が挙げられる．「実体」の観念については，可感的な諸性質がある共通主体のうちに存在し，この主体によって支えられていると考えられる場合，この主体もしくは支えが実体であるとされる（2.23.4）．しかし，感覚的諸性質とは次元を異にした実体の観念がいかにして成立するのかの明確な説明はない．「関係」の観念は，知性が二つの事物を合一せずに継起的に結びつけて眺めることによって生ずるが（2.12.1; 2.25.1），すべての事物は，知性によって相関づけられ得る（同 2.25.7）．例えば，原因と結果の観念は，一方が他方の作用によって存在し始めるのが見出されたときに生ずる（2.26.1）．

c　観念の生成

ロックにおいては，彼が言うところの観念の「起源」については述べられていても，その生成過程については十分に説明されていない．1699 年刊の『人間知性論』第 4 版で増補された「観念連合について Of the association of ideas」（第 2 巻第 33 章）においても，それが習慣化された偏狭な見解を生むものとして否定的にみなされており，観念の成立や複合の過程を説明する原理とはならない（『人間知性論』2.33, vol. 1 pp. 335–341）．単純観念にせよ，複合観念にせよ，ある心理的な過程を経て成立した結果

として語られるのみで，外的事物の性質ではない単純観念が感覚を通じてどのようにして成立するのか，また，それらがどのように結合して複合観念となるのか，その生成過程を通じて説明されることはない．単純観念は複合観念の素材的な構成要素に過ぎず，複合観念を特徴づける諸形式が単純観念をどのように結びつけることによって成立するのかは依然として明らかにされない．ロックは，感覚的な経験を超えた実体の観念に対応して物体や精神の「実体」が「実在」することを確信しており，このような彼の経験論的立場の不徹底が，観念の生成に関する説明を曖昧なものにしている．ロックにおける「経験」が供給するのは，知識や思考を可能にする観念の形式ではなく，それらの材料となる観念の内容であり，観念の形式は心の中にすでに用意されているもののように思われる．観念が形式と内容の両契機から成るとするならば，実際，抽象的な観念も一定の意味内容を有しており，ロックの議論からは，（いわば「形式の形式」とも言える）観念の形式自体が何に由来するかは明らかにならない．ロックにおいては，観念の形式は経験から独立して存在し，その内容のみが経験に依存しているかのようである．

1.2　観念連合と相関の論理

a　印象と観念

ヒューム David Hume は，『人性論 A Treatise of Human Nature』（1739–1740 年）において，人間の「知覚 perception」を「印象 impression」と「観念 idea」とに分ける．彼によれば，「印象と観念との相違は，それらが心［精神］mind を打って思考や意識へと入っていくときに伴っている力 force と生気 liveliness の程度にある．最大の力と激しさを伴って入ってくる知覚を印象と名づけることができる．そして私は，印象という名の下に，心［心魂］soul の中に初めて出現した感覚 sensation，情緒 passion，情動 emotion のすべてを包括する．観念によって，私は，思考

や推理におけるこれら［感覚，情緒，情動］の淡い影像 faint image を意味する」（『人性論』1.1.1, p. 7[2]）．このようにヒュームは，印象を観念の原型もしくは母胎とするが，印象は知覚と等値とされるのみで，その生成に関する説明はない．

さらに，「印象」は「感覚」の印象と「反省」（内省）の印象とに二分される．「最初の種類［感覚の印象］は，心魂 soul の中で未知の原因によって原初的に起こる．第二の種類［反省の印象］は，大部分，観念に由来するが，それは次のような順序で生じる．まず印象が感官を打って様々な種類の寒暖，飢渇，快苦を知覚させる．この印象は精神 mind によって複写 copy され，この複写は，印象が途絶えた後も残る．これが観念と呼ばれる．この快苦の観念が心魂 soul に戻ると，欲望や反感，希望や恐怖などの新しい印象を生み出す．これらの新しい印象は反省に由来するため，反省の印象と呼んでよいであろう．これらもまた，さらに，記憶や想像によって複写されて観念となり，これらの観念も，また，おそらく他の印象や観念を引き起こすであろう．それ故，反省の印象は，それらに対応する観念より前にあるだけで，感覚の印象より後れ，それらに由来するのである」（『人性論』1.1.2, p. 11）．このように，ヒュームにおいては，印象と観念の生成が soul と mind の二段階に分けられた心の働きによって動的・重層的に捉えられている．

b　観念連合

ヒュームは，印象と観念を単純なものと複合的なものとに分けるが，「複合観念」の生成は，意識における広義の「想像 imagination」作用に基づく観念間の「連合 association」による．「あらゆる単純観念は，想像によって分離されるとともに，好みの形態に再び結合され得る」が，「単純観念を結合する絆，すなわち，それによってある観念が自然に他の観念を導き出す連合性質 associating quality を欠いては，（普通に行われるよう

に）同じいくつかの単純観念が規則的に複合観念になることは不可能である」（『人性論』1.1.4, p. 12）．その「連合性質」には，「類似 resemblance」，時間や場所における「近接 contiguity」，「原因と結果 cause and effect」の三種類がある（p. 13）．「想像」において働くこのような「諸関係」の間には「一種の引力 attraction がある」が「この引力は，心的世界において，自然界におけると同様に，数々の驚くべき結果をもたらし，また数多く，多様な形をとって現れる」（p. 14）．

ヒュームにおいても，複合観念は，ロックと同様に，「関係 relation」「様相 mode」「実体 substance」に区分される（『人性論』1.1.4, p. 14）．しかし，ヒュームは，「実体観念も，様相観念と同様に，想像によって結合され，特定の名称を割り当てられた単純観念の集合に過ぎず，この名称によって，私たちは，その集合を自他に想起させることができる」（1.1.6, p. 16）のだとする．このように実体と様相も観念の連合に基づくものとみなすことは，彼が，すべての論理的関係を広義の「関係」，観念間の「相関」に基づくもとの捉えていることを示している．

c　信念と情動

ヒュームによれば，「印象」と「観念」との相違は，「力」と「生気」もしくは「活気 vivacity」の程度の相違に過ぎない．さらに，「信念 belief」も，「観念に付加的な力と活気を付与」するところから，「現前する印象と関係もしくは連合した生き生きとした観念 lively idea」と規定される（『人性論』1.3.7, p. 67）．このような信念は，観念が「情緒 passion」や「情動 emotion」に及ぼす影響を通じて，その力と活気の高まりを示す．「信念の効果は，単なる観念を高めて印象と同等にし，情緒に対する観念の影響を印象と同様にすることである．この効果を信念は，力と活気において観念を印象に近づけることによってのみ持ち得る」（1.3.10, p. 82）．「信念は情緒の喚起にほとんど絶対的に必要であるが，同様に，情緒もまた信念を生

むのに有利である」(ibid.)．さらに，情緒あるいは情動は，想像と結び付いて，観念の力と活気を増大させる．「情動は容易な推移によって想像へと移る．そして，心を感動させる対象の観念の上に広がり，その観念の力と活気を増大させ，その結果，その観念に対して同意させる」(ibid.)．このようにヒュームは，心の働きとその産物もしくは結果を，観念を結節点とした「印象–観念–信念」，「情動(情緒)–観念–想像」の連関として，重層的に構造化された形で説明している．soul と mind との間を往還する生きた心の働きにおいて，印象と観念は，信念や情動という力動的な意識と交差的に相関する．想像された観念は，それに伴う情動性を通じて，当初の印象としての実在感を取り戻すことになる．ヒュームの用語を用いれば，私たちの想像的な意識にとって生き生きしたものと見える美的対象は，情動性に基づいて抽象的な観念が具体的な印象として捉え直されたものとなる．

1.3　内外の媒介者としての言語――連合法則と文の構造

a　観念の記号

ロックは，『人間知性論』第4巻第21章「諸学の区分について」において，「フィシカ physica」(自然学) と「プラクティカ practica」(実践学) に並ぶ第三の学として，「セーメイオーティケー sēmeiōtikē」すなわち「記号論 doctrine of signs」を挙げ，これについて，以下のように説明する．「記号のもっとも通常的なのは言葉であるから，セーメイオーティケー，記号論はロギケーすなわち論理学 logic と名づけられるのに十分ふさわしい．その仕事は，事物を理解し，知識を他の人々に伝えるために心が使う記号の本性を考察することである」(『人間知性論』4.21.4, vol. 2 p. 309)．「私たちの思想を自分自身で使うよう記録するためと同様に，相互に伝達するためにも，観念の記号は必要である」(ibid.)．「そこで，おそらく，もし観念と言葉が判明に比較考量され，適正に考察されたとした

ら，それらは，私たちがこれまで馴染んできたものとは別な種類の論理学と批評 critic を与えてくれるであろう」(vol. 2 p. 310)．ここで，これまでの思考の規則もしくは方法としての論理学とは別種の論理学とされるものは，観念と言語との関係を明確にする経験論的な論理学を指すのであるが，思弁的な抽象性を排した経験論の立場を徹底した場合に，論理学と言語学とは一体化し，さらには，論理学は言語使用の一部を扱う学問分野として言語学の一部に取り込まれることになろう．

そのような事態を予告するように，ヒュームは，『人性論』において，言語による観念の一般化について以下のように述べている．「私たちは，しばしば出会ういくつかの対象の間に類似を見出してしまえば，量および質の程度にどれほどの相違が見られようと，その他の相違がどれほど現れようと，すべての対象に同じ名称 name を当てはめる．この種の習慣を得てしまった後は，この名称を聞くと，これらの［類似した］対象のうちの一つの観念がよみがえり，想像はあらゆる特殊な事情および割合を伴ってこの観念を想い描く」(『人性論』1.1.7, p. 18f.)．「このような仕方で，同じ観念が，本性的に特殊であるが，他を代表する表現性 representation において一般的であるという逆説が説明される．一般名辞 general term に結びつけられることによって，特殊観念 particular idea は一般的となる．すなわち，習慣的連結によって，他の数多くの特殊観念と関係を持ち，想像においてそれらの諸観念を直ちに想起させる名辞に結びつけられることによって，そうなるである」(p. 20)．ヒュームにおいては，観念が一般化されるのは，観念に対する記号である言語が，互いに類似する特殊観念の間の連合に基づいて，それらを代表する一般的な名辞として捉えられるからだとされる．一連の観念が言語の意味のもとに総括されることにより，特殊性と一般性という論理関係は，特殊な諸観念を代表する一般名辞としての言語の使用という言語行為に置き換えられる．すなわち，論理的な包摂関係は，相関する諸観念を代表する名辞の習慣的な使用に還元されてしまう．

b　連合法則

ヒュームは，観念連合の原理として，「類似」「近接」「因果」を挙げるが，反省的な意識の働きに基づく因果関係は，いわば自動的な意識の働きである前二者とは次元を異にしている．ヒュームによれば，因果関係とは，二対象の近接，継起，恒常的連接に基づき，その必然性は，これらの事象に習慣的に接したことから生まれた信念にすぎない．或るものが他のものから生ずると考えるのは，或るものが他のものに時間的に続いて起こるのを見慣れているからであって，私たちは継起関係から因果関係を作り上げるのである．そして，このような因果関係が想定されるのは，広義の近接関係，および，それに類似する関係が認められる場合であり，因果関係は，より根源的な近接と類似へと還元されることになる（『人性論』1.3.15「原因結果を判定する規則について Rules by which to judge of causes and effects」，pp. 116–118）．因果性は，経験を超えた普遍的原理ではなく，人間の習慣的心理を規定する法則に過ぎないとされる．このような因果関係の否定に示されるのは，観念間の包摂関係を一般名辞としての言語使用へと還元し，一切を相関関係において捉えようとするヒュームの態度である．

観念連合が基づく相関の論理は，ヒューム以降，経験論的認識論と連結した心理学の分野で「連合法則」として一般化される．いわゆる「連合［連想］心理学」を発展させた思想家の代表として，ハートリー David Hartley，ブラウン Thomas Brown，ジェイムズ・ミル James Mill，ジョン・スチュアート・ミル John Stuart Mill，スペンサー Herbert Spencer 等の名前が挙げられる[3]．なお，すでにヒュームの因果関係批判によって示唆されていたことではあるが，「近接 contiguity と類似［相似］similarity」が心理的連合における二つの基本的な原理と捉えられるのは，ベイン Alexander Bain においてである[4]．

c　文の形成

連合法則は，後に，認識論や心理学の領域を越えて，構造主義言語学において言語の構造の解明へと適用されることになる．ヤコブソン Roman Jakobson は，〈言語の二つの面と失語症の二つのタイプ Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances〉（1956 年）[5] において，顕在的には「線」（単次元）的構造をなす言語を，潜在的に（いわば縦軸と横軸との交差として）二次元的に構成している「範列 paradigmatic 軸」と「統辞 syntagmatic 軸」について，それぞれの構造化（構成）の原理を「選択 selection」と「結合 combination」と規定している．「選択」（置換）されるものは「与えられたメッセージ」の中ではなく「コード」の中で潜在的に連関し，「結合」されるものは「コードとメッセージの双方」または「実際のメッセージ」の中で顕在的に連関する（訳書 p. 26）．受信者は，「与えられた発話（メッセージ）」が「構成部分（文，単語，音素など）」の「結合」によって成り立ち，構成部分があらゆる可能的な構成部分の「貯蔵所」（コード）から「選択」されたものであることを知覚するが，結合されて「脈絡」を形成するものは「近接 contiguity」の状態にあり，「置換」（選択）可能なものは「類義語」から「反義語」まで様々な「類似 similarity」によって関係づけられている（ibid.）．このように言語における選択（置換）と結合（結構）は，潜在的に選択可能な要素間の類似関係と語や文の形で顕在化された要素間の近接関係とにそれぞれ基づいている．しかし，類似と近接という連合法則に対応する選択と結合の原理を，線的構造を成す言語（文）を構成する縦横二軸を規定するものとして指摘したとしても，それは相関の論理に基づく言語の記述もしくは表現機能を説明するのみで，命題としての言語の判断もしくは理解の機能を説明したことにはならない．

内的な観念との意味的相関に基づく観念の記号としての言語は，「類似と近接」もしくは「選択と結合」を原理として，心の内外を媒介するもの

として位置づけられ，記号論としての論理学は，観念に対する適切な言語使用を指導するものとなる．経験論が，経験から出発するという，その立場を徹底するならば，論理が，心理的な連合法則に，また，言語の構造へと置き換えられるのは自然なことであろう．しかし，経験論哲学における観念の記号としての言語の把握は，外的および内的な相関の論理に基づいて事象を明晰に記述する表現機能に即したものであって，主語と述語によって命題を構成し，事象を論理的に判断する論弁機能に即したものではない．言語は相関の論理にのみ基づくものではなく，判断を示す命題としての言語は，繫辞を介した主語と述語との包摂関係によって成り立つ．相関の論理に従う言語使用では，論理的な判断の必然性を説明することができない．そのためには，意識に対して具象性を保っている観念間の類似・近接関係ではなく，高度に抽象化された概念間の類・種関係を前提とした「包摂」の論理を必要とする．

2　超越論哲学と感情移入

2.1　綜合判断と包摂の論理

a　超越論哲学

カント Immanuel Kant の『純粋理性批判 Kritik der reinen Vernunft』（1781年，1787年［第2版］）は，ロック以来ヒュームへと至るイギリス経験論とライプニッツの思想を基にヴォルフによって体系化された大陸合理論とを批判的に統合し，それぞれの帰結である懐疑論と独断論を調停し，独自の超越論哲学を基礎づける試みである．カントは，合理論によっても経験論によっても説明できない経験の内容と形式との綜合について，独自の超越論的観点から，その普遍的な原理を明らかにしようとした．カントによれば，「我々が対象によって触発されるという仕方で表象を得る能力（受容性）が感性 Sinnlichkeit と呼ばれる．それ故，感性を介して我々に対象が与えられ，感性のみが我々に直観を供給する．しかし悟性

Verstand によって対象は思考され，悟性から概念が生じる」（『純粋理性批判』S. 33[6]）．そして，「感性のア・プリオリなすべての原理についての学」が「超越論的感性論」と呼ばれ，それは「悟性」による「純粋思考の諸原理」を含む「超越論的論理学」と呼ばれる部門と一対をなす（S. 35f.）．ただし，「すべてのア・プリオリな認識がではなく，ある種の表象（直観ないし概念）がもっぱらア・プリオリに適用され，可能であるということを，またいかにしてそうであるのかを，我々がそれによって認識するア・プリオリな認識だけが超越論的（すなわち，認識のア・プリオリな可能性ないしは使用）と呼ばれねばならない」（S. 80）．

b　直観と概念をつなぐ図式

カントにおける「直観」と「概念」は，ロックにおける「観念」の内容面と形式面を分離・独立させたものとみなすことができる．カントによれば，認識は（「純粋直観形式」としての「時間」（内感の形式）および「空間」（外感の形式）と「純粋悟性概念」としての諸「カテゴリー［範疇］」との綜合に基づく）「直観」と「概念」との「綜合」によってはじめて可能となる．そのためには「対象の概念を感性的たらしめる（すなわち，その概念に直観における対象を付加する）ことが必要であるのと同様に，対象の直観を悟性的たらしめる（すなわち，その直観を概念のもとへともたらす）ことが必要である」（『純粋理性批判』S. 75）．そして，それを可能にするのが「超越論的構想力」であり，それが有する「図式 Schema」機能である．「感性的直観における多様なものを結合するのが構想力であり，この構想力は，知性的綜合の統一に関しては悟性に，また覚知 Apprehension における多様なものに関しては感性に依存している」（S. 164）．また，「構想力がある概念に像 Bild を与える一般的な仕方の表象を，この概念の図式と私は名づける」（S. 179f.）．「純粋悟性概念の図式は，構想力の超越論的所産であり，それは，すべての表象が統覚の統一に従ってア・プリオリに一つの概

念において関連づけられねばならない限りにおいて，すべての表象について，時間という形式の諸条件に従うところの，内感 innerer Sinn 一般の規定に関わっている」(S. 181)．このようにカントは，直観と概念とを媒介する「図式」の働きを，純粋悟性概念としてのカテゴリーを「時間規定」として充実させることだとしている[7]．しかし，時間は，たとえ「外感」の形式（空間）とは区別された「内感」の形式とされるにせよ，純粋直観形式として規定される限り，無時間的な論理の外にあり，概念とは無縁なものにとどまる．直観と概念とが綜合されるためには，時間は，カテゴリーを直観的に充実させるものとして，無時間的で可逆的である論理的な「判断」の形式の内に取り込まれざるを得ない．『純粋理性批判』の初版と第二版との間に見られる認識における構想力の役割の後退的な位置づけと同様に，このような論理的な判断のうちに時間規定を取り込んでしまうカントの態度は，彼の論理主義を示すものとなる．

c　判断による統一

カントは，「判断」を以下のように規定している．「判断は，与えられた諸認識を統覚 Apperzeption の客観的統一へともたらす様式以外の何ものでもない．判断の中にある関係小詞［繋辞］である ist は，与えられた諸表象の客観的統一を主観的統一から区別するために，統覚の客観的統一を目指している．たとえ判断そのものは，例えば，物体は重さをもつ［ものである］というように経験的であり，したがってまた偶然的であっても，この関係小詞は根源的統覚に対する諸表象の関係とこれらの表象の必然的統一とを表示するからである」(『純粋理性批判』S. 141f.)．また，「悟性が一般に規則の能力として説明されるならば，判断力は，規則のもとに包摂 subsumieren する能力，すなわち，あるものが与えられた規則に従うもの（与えられた規則の事例 casus datae legis）であるのかどうかを判別する能力である」(S. 171)．このように「判断」とは，意識の「統覚」作用に基づ

いて，表象を「統一」し，それを特定の概念へと「包摂」することである．このような判断の包摂性は，観念の連合に基づく経験論哲学によっては説明できない[8]．何故なら，包摂作用は，並存的・継起的な相関性を超えているからであり，カントの連合説批判は，経験的な相関の論理（直観の論理）と超越論的な包摂の論理（概念の論理）との相違を示している．

2.2　統覚と感情移入

a　意識の同一性

直観を概念のもとに包摂し，対象の論理的な判断を可能ならしめる「統覚」は，意識における「多様なもの」を「統一」する「主観［主体］」としての「意識の同一性」である．「私は考える Ich denke，ということが，他の一切の表象に伴い得なければならない」（『純粋理性批判』S. 131）．「私はまたこのような統覚の統一を自己意識 Selbstbewußtsein の超越論的統一とも名づけるが，それは，ア・プリオリな認識がこの統一によって可能であることを示すためである」（S. 132）．「すなわち，直観において与えられた多様なものを統覚するところの一貫した同一性は，諸表象の綜合を含み，またこのような綜合の意識によってのみ可能である．何故なら，様々な表象に伴う経験的意識は，それ自体ではばらばらであり，主観の同一性に対する関係をもたないからである．それ故，この関係は，私がそれぞれの表象を意識することによってはまだ成立せず，私が一つの表象を他の表象に付け加えて，これらの表象の綜合を意識することによって成立する．したがって，私が与えられた諸表象の多様なものを一つの意識において結合し得ることによってのみ，これらの表象における意識の同一性そのものを表象することが可能となる」（S. 133）．このように多様なものを統一する「意識の同一性」は，多様な表象を綜合することによって対象の同一性を確立すると同時に，自らの同一性を自覚し，これによって，いわば時間の中で時間を超える．

b　感情移入

主観における時間を超えた「意識の同一性」としての「超越論的統覚」は，情動から思考に連なる意識の重層的構造に従って，認識のみならず，感性的・心理学的な対象把握である「感情移入 Einfühlung」の原理ともなる．リップス Theodor Lipps は，『心理学原論 Leifaden der Psychologie』（1903 年，1909 年［第 3 版］）において，統覚に基づく感情移入について以下のように説明している[9]．広義の「感情移入」は，「私とは異なる対象における私の客観化」（『心理学原論』S. 222[10]），すなわち「ある対象を統覚することによって，私の内的行動 Verhalten の一定の仕方をその統覚された対象に属するもの，あるいはその対象の内に構成要素として存するものとして体験する」ことである（S. 223）．特定の感情を対象に見出す個別的な感情移入に先立つ「一般的統覚的感情移入 allgemeine apperzeptive Einfühlung」は，「私がすべての対象を，その特質と区別において私の精神的所有とする時に，私がそれらすべての対象を私の活動すなわち私の生命で浸透すること」を意味する（S. 224）．そして，「物の世界におけるあらゆる力，活動，あらゆる作用［能動］と受動は，まったく感情移入によってこの物の世界の中へ入り込む」（S. 227）．このようにリップスは，感情的な意識主体［主観］による対象の統覚作用を特定の感情移入の前提となる一般的な原理としている[11]．

c　感性的統一

リップスは，『美学――美と芸術の心理学 Ästhetik. Psychologie des Schönen und der Kunst』（第 I 部 1903 年，第 II 部 1906 年）の第 I 部『美学の基礎づけ Grundlegung der Ästhetik』において，「多様における統一 Einheit in der Mannigfaltigkeit」について，その悟性的な統一とは異なる感性的もしくは直観的な統一のあり方を，美的な感情移入の原理として，以下のように説明している．対象の質的統一性を示す「美的形式原理」が

「多様における統一」であるが，この原理はさらに「通相分化の原理 Prinzip der Differenzierung eines Gemeinsamen」と「君主制的従属の原理 Prinzip der monarchischen Unterordnung」とに区別される[12]．前者は，すべての部分に何らかの「通相［共通性］」が認められ，全体がその各部分に「分化」したものとして現れる場合であり，後者は，共通性を前提としつつも，全体の中のある特定の部分が他の諸部分を圧倒し「従属［服従］」させている場合である．このような「多様における統一」は，同じく意識の統覚作用に基づくものではあるが，概念による対象の理論的把握とは異なり，悟性の関与を欠いた直観による感性的統一の実例と考えられる．統覚的な感情移入の働きによって，対象相互の関係は，概念を欠いたままで，諸部分から構成される全体として，感性的に統一される．論理的な統一が差異を捨象して概念的同一性に収斂するのに対して，感性的な統一は，差異を残しながら直観的同一性を表示する．このような感性的統一は，概念による統一が論理的な包摂関係によって閉ざされているのに対して，直観的に把握された表象間の相関関係に基づくものとして可変的に開かれている．

2.3　悟性と感性――多様の統一と統一の多様

a　認識と美

カントは，『判断力批判 Kritik der Urteilskraft』（1790 年）において，認識と美との相違を，悟性と感性，論理的なものと感性的なものとの超越論的な区別に基づいて，論理的な「認識判断」と感性的な「趣味判断 Geschmacksurteil」との相違として説明している．これは，カントが『純粋理性批判』において〈Ästhetik〉を美学の意味ではなく感性論としてのみ使用していることと並んで，美に対する感性的な認識を論理的な認識に類比的なものとして捉えるバウムガルテンに対する批判となっている．「何かあるものが美しいか否かを判別するために，我々は，認識のために

表象を悟性によって客観に関係させるのではなく，構想力（おそらく悟性と結びついている）によって表象を主観と主観における快・不快の感情とに関係させる．それ故，趣味判断は認識判断ではない，したがって論理的判断ではなく，美的［感性的，直感的］ästhetisch 判断である．ここで美的というのは，判断の規定根拠が主観的なものでしかあり得ないということである」（『判断力批判』§1, S. 3f.[13]）．「快・不快の感情に対する関係においては，客観における何ものかが表示されるのではなく，主観が表象によって触発されるままに自分自身を感じる」（S. 4）．このように，カントにおいて認識と美とは，概念に基づく論理性と快・不快の感情に基づく直観ならびに直感性とによって区別される．このような区別に基づいた美は，「構想力と悟性の遊動」に基づく「快の感情」という主観的規定（§9）と「目的」の概念を欠いた「合目的性」という対象的規定（§§10, 11）との相関において捉えられる．

b　芸術美の位置

認識と美との関係が，単に論理的な区別ではなく，心理と論理とを媒介する超越論的な区別に基づくものであるが故に，両者は重層化された複雑な関係をなす．カントは，認識に先立つ美的判断の標準的な対象を「自然美」とし，対象の概念を前提とする「芸術美」を，概念に付属した二次的な美とみなしている．両者の差異は，「自由美」と「付属美」として以下のように説明される．「美には二通りの種類がある，すなわち自由美 freie Schönheit, pulchritudo vaga と付属美 anhängende Schönheit, pulchritudo adhaerens である．自由美は，対象が何であるかという概念を前提としない．付属美は，そのような概念とこの概念に従った対象の完全性とを前提とする．前者の美は，あれこれの事物の（それ自体だけで存立する）美と呼ばれる．もう一方の美は，概念に付属する美（条件付きの美）として，特定の目的の概念によって規定されているような対象に付与される」（『判

断力批判』§16, S. 48f.).

これは，カントが「感性的なもの」を認識判断に先立つ「主観的」なものと規定した「美的判断」に対する彼の体系的位置づけに由来する帰結ではあるが，「芸術美」の現象を，対象の概念に付属する美として，自然美の規定との異同を示すことなく放置していることは，彼の美学の難点もしくは破綻を示すものと考えられる．これについて，ヒュームのように「観念」が「情動」を伴うことによって「印象」に近づくことを認めるのであれば，認識と美，論理的なものと感性的なものとの対立を前提とした芸術美をめぐるアポリアは解消する．何故なら，芸術美を情動によって裏打ちされた生き生きとした対象の現出として捉えればいいのであり，実際，カントの美的判断の規定は，体系上の要請に基づいて自然美に即した美的判断を認識判断の前段階と位置づける領域限定的な規定を除けば，その本質においてはこのような規定と矛盾してはいない．

c　理解と表現

カントが「快・不快の感情」の根拠として美的判断の主観的規定とする「構想力と悟性の遊動」は，意識に対する「対象」を直観的な「像」として，その生き生きとした具象的なあり方において維持する働きであり，それは，概念による対象認識以前の段階のみならず，対象の概念が見出された以後にも生じ得る．そうでなければ，対象の認識の後に可能となる「芸術美」は成り立たなくなる．また，リップスの感情移入美学において概念に基づかない感性的統一が語られたことによっても明らかなように，「感性的なもの」は，「論理的なもの」に直観を提供するだけの従属的な地位にあるわけではない．芸術美の現象に即して，対象の概念的認識以後にも存続する直観の多様性と概念の統一性との並存関係を示すために，「多様の統一」と「統一の多様」という語を用いることが許されるならば，「多様の統一」とは，意識の統覚作用に基づく，概念を通じた悟性による直観

の包摂であり，「統一の多様」とは，意識の連合作用に基づく，感性による直観と直観との関係づけ（相関）と考えることができる．前者は概念的な「理解」，後者は直観的な「表現」として捉えられる．「多様の統一」としての理解は包摂関係における全体性の概念的把握（悟性的統一）であり，「統一の多様」としての表現は相関関係における全体性の表象的呈示（感性的統一）である．多様の統一は，意識が表象像を内包的に判明な概念のもとに理解するための論理形式であり，統一の多様は，意識が概念を外延的に明晰な表象像として表現するための論理形式である．両者の関係は，前者が後者を一方的に包摂するような段階的・従属的なものではなく，むしろ互いに共存するものとして，継起的・交代的である．多様の統一を志向する理解と統一の多様を志向する表現は，認識と美とを含む，現実的な出来事としての芸術現象を構成する二面である．

3　意識の現象学と反転の論理

3.1　意識の流れと受動的綜合

a　統覚と時間意識

すべて現象するものは時間の中にあるとしても，時間を意識するものは時間を超えていなければならない．すなわち，時間の中にあるものとしての「意識の流れ」は，時間を超越した立場において「流れの意識」として自覚されねばならない．事物の持続ならびに変化を通じて時間を意識させるのは「統覚」の働きである．生成変化する事物とともに継起する，時間の中にある「意識」は，それ自体，生成流動し過ぎ去っていくが，統覚作用として自己同一的にとどまるところの意識，すなわち「私は考える」として対象の意識に伴う「自己意識」は，生成流動するものの内に持続的な対象を見出す．統覚とは，時間の中にあって時間を意識することができる意識の自己超越的なあり方であり，このような時間的（可変的）な自己を超越することによって無時間的（同一的）な自己を意識するところの自己

超越的な意識が，時間的な心理と無時間的な論理との根底的な結節点となる．心理は，それが時間的現象として捉えられる限りは，無時間的な論理を説明することができない．言いかえれば，心理の立場からは，時間的な相関の論理は記述できても，無時間的な包摂の論理を説明することはできない．心理と論理とが結びつくためには，意識が時間自体を意識することによって自らの時間的な意識のあり方を超越する必要がある．

カントは，超越論的統覚に基づく判断において時間的な意識の内にある直観と無時間的で意識を超えた概念とが「綜合」されるとしたのであるが，直観を概念へと包摂するその論理主義的な試みが，まさにその論理性の優位の故に，彼が意図したようには人間による認識のア・プリオリな普遍妥当性を証明することに成功したとは言えない．そこで，以下では，心理の時間性と論理の無時間性との対立をめぐって，心理主義を批判することによって独自の論理主義的な現象学を提案しながら一種の心理主義へと回帰した晩年のフッサールの「発生的現象学」について，認識における論理主義のみならず存在の論理的把捉（存在の論理学）をも代表するヘーゲルの弁証法論理と比較しながら，概念化作用へと至る意識の段階的な展開と概念もしくは言語を通じた論理的な命題の生成に関する両者の説を検討する．その後，時代を遡って，フッサール中期の「超越論的・構成的現象学」における志向的意識の分析について改めて検討し，そこにヘーゲル的な閉じた論理主義を破る，時間的なものと無時間的なものとが反転的に相関する心理と論理との開かれた関係性を指摘する．

b　受動的綜合

フッサール Edmund Husserl 晩年の発生的現象学について，ラントグレーベ Ludwig Landgrebe が遺稿を体系的に編集した『経験と判断 Erfahrung und Urteil』（1939 年）においては，主語と述語との区別に基づく悟性的認識に先立つ「受容的」な「前述語的経験」，すなわち主－述の

構造をとらない時間的な「感性的意識の統一」ならびに「連合」に基づく意識の「受動的綜合 passive Synthesis」が，以下のように説明されている．「感性的知覚の統一，直観的対象意識の統一は，感性的意識の統一であり，そこでは，それ自体で完結した個物であれ，多数の個物であれ，すべての対象が，包括的で，対象的統一を可能にする時間持続 Zeitdauer の形式のうちに，その形式とともに根源的に与えられる」（『経験と判断』§36, S. 181[14]）．「しかし，時間的に分断された自我の志向的諸対象の間に，直観的な連関，直観の統一が実際に打ち立てられるには，対象が一つの自我意識 Ichbewußtsein の中で共に–構成されて–いる Zusammen-konstituiert-sein という事実だけではまだ十分ではない．そもそも時間意識は一般的形式を打ち立てる意識に過ぎない．知覚と想起，すなわち知覚の志向的対象と想起の志向的対象を実際に呼び起こし，それらを実際に直観的に統一するのは，時間意識の最低部の綜合を一段高めた受動的綜合であるところの連合［連想］の作用 Leistung である」（同 §42, S. 207）．このようにフッサールは，「前述語的」すなわち述語的・概念的な包摂作用に先立つ「自我意識」の受動的な「綜合」の働きを，「時間意識」に基づく「対象」の「構成」とそれらを相関づける「連合［連想］」作用の二つの段階に分けて説明している．意識の「感性的」な統一は，知覚における可感的関係性の統一であり，それによって，いわば，対象としての「図」が様々な関係性を含む「地」から立ち現れてくる．それは，さらに，表象と表象とを相関づける連合作用に基づいて直観的に統一される．

c　意識の諸段階

一方，ヘーゲル Georg W. F. Hegel は，『精神の現象学 Phänomenologie des Geistes』（1807 年）において，現象する意識の歴史，意識が哲学的知へと形成されていくさまざまな発展の過程を述べている．意識の展開は，意識それ自身の各段階の状態が意識に対して対象的となり，すなわち即自

的であった意識が自分自身のあり方を知ることによって対自的となり，より高い段階に達する．直接的な意識である「感覚的確信 Die sinnliche Gewißheit」が，「知覚 Wahrnehmung」を経て，「概念」の能力の最初の段階である「悟性 Verstand」へと展開する過程が，以下のように記述される．それは同時に，意識が感覚的な段階から超感覚的な段階へと高まる過程でもある．

「意識」の発展の過程において「感覚的個別性は，直接的な確信の弁証法的運動の中で消えて，普遍性［一般性］となるが，これは感覚的普遍性に過ぎない．思いこみ Meinen は消え去っており，知覚は，即自的にあるところの普遍者一般としての対象をつかむ．それ故，個別性は，知覚においては，真の個別性，一なる即自存在として，あるいは自己自身へと反転［反省］した存在 Reflektiertsein in sich selbst として現われてくる．しかし，これはなお制限された対自存在であり，これと並んで別の対自存在，すなわち個別性に対立し，個別性によって制限された普遍性が生じてくる」（『精神の現象学』A 意識，Ⅱ知覚，*Hegel Werke*, Bd. 3, S. 104f.[15]）．「個別性，個別性に対立する普遍性，ならびに非本質的なものに結びついている本質，必然的であると同時に非本質的なものといった空虚な抽象は力であり，これらの力の戯れが時に良識と呼ばれる知覚的悟性である」（S. 105）．このような力としての普遍は，二種もしくは二段階に分けられる．「私たちが第一の普遍をそこにおいて力がまだ対自的になっていない悟性の概念として考える限り，この第二の普遍は，即自かつ対自的に自己を表現しているところの力の本質である」（S. 115）．「第一の普遍が自己に押しもどされた力，実体としての力であるならば，第二の普遍は，物の内面，すなわち概念としての概念と同一であるところの内的なものである」（S. 115f.）．「普遍と個別の対立から純粋になり，悟性に対するものとなった絶対的に普遍的なものとしての，この内的な真において初めて，現象する世界としての感覚的世界を超えて，真の世界としての超感覚的世界が開けてくる」

(S. 117)．このようにヘーゲルにおいては，感覚的確信としての意識が概念の能力の最初の段階である悟性へと発展する過程が，弁証法的な自己否定の運動として連続的に捉えられている．

3.2　対象化と述語づけ

a　能動的対象化

フッサールによれば，表象的な意識を超えた概念化作用を通じて主語と述語との関係において捉えられた主語的対象は，それ以前の「時間意識」と「受動的綜合」とに基づく「直観的な対象意識の統一」を前提としてはいるが，このような感性的な前述語的経験と悟性的な述語的認識とは意識の段階を異にしており，両者は，直接的・同次元的に相関するのでも，弁証法的に連続するのでもない．「ここで問題となるのは，新しい種類の客観［対象］化 objektivieren 行為であり，前もって与えられ，受容的に把握 erfassen された対象 Gegenständlichkeit に即した単なる活動ではない．述語的認識やそれの述語的判断という表現において構成されるのは，新たな対象であって，それ自身が再び把握されて主題 Thema となり得るのである．こうした論理的な形成物 Gebilde を，私たちは katēgorein つまり陳述［言明］判断から発したものという意味でカテゴリー的対象とも，また（確かにその判断は悟性の行為だから）悟性対象とも名づけよう．そこで，能動性の高次の段階に属するこの認識行為は，受容性との対比において，創造的な，対象そのものを自ら生み出す自発性と特徴づけられる」(『経験と判断』§47, S.233)．しかし，先に見た「時間意識」と「連合作用」とに基づく「受容的経験」とこのような「判断」を通じた「述語的自発性」という意識における二段階の行為は，「異なった行為 Leistung として互いに離れて存在するかのように理解されてはならない．分析の目的から別々に取り扱われざるを得ず，発生的には異なった客観化の段階に属するものとして認識されるものが，むしろ事実上，通例として密接に絡まり

合って ineinander verflochten いる」（§49, S. 239）．このようにフッサールが，「受容的経験」と「述語的自発性」との対応を単に「絡まり合って」あるいは「重なり合って übereinander gebaut」（S. 240）いるとしか言い表すことができず，心理的にも論理的にも十分に説明し得ていないことは，「すべての個別的経験の普遍的基盤として，経験の世界として，すべての論理的行為に先立って直接に予め与えられているような世界」（§10, S. 38）としての「生活世界 Lebenswelt」概念の曖昧さと並んで，認識をめぐる心理と論理との関係における根源的なアポリアを呈示している．

b　主語–述語構造

フッサールは，主語（S）と述語（p）との相互関係を，「として規定される」関係として以下のように説明する．「主語化 Subjektion としての S の自発的な把握から，それを p へと規定し同一視する活動が生じる，すなわち把握の眼差しは S が p として規定されるのを把握する．すでにこれに先立つ解明 Explizieren において，客体 Objekt は潜在的に p として〈規定されて bestimmt〉いる，つまり p として明確化され明瞭化されている．しかし，〈として規定–される［自己を–規定する］Sich-bestimmen als〉ということは把握されていない．このことは，これに先立つ解明を前提とした新たな綜合の能動的な遂行の中で初めて把握される．S はすでに解明されたものとして意識されねばならないが，その解明がどのようなものであれ，まさにこの時点で同一の S として述語的に定立される．他方，その S は解明されるべきもの［被解明項］であるという形式のもとにあり，それは主語の形式のうちに定立され，p がそれに対する規定を表現する．〈である ist〉［繋辞］において，被解明項 Explikand と解明項 Explikat との綜合が能動的に遂行される．つまり，繋辞は，として–規定–される Sich-bestimmen-als という把握を表現する形式であり，この把握形式が，述語行為において把握されるすべての〈事態 Sachverhalt〉の存立

要件をなす」(『経験と判断』§50, S. 245f.). 繋辞によって示されるSをpとして把握する働きが，意識が対象を論理的に把握する始まりであり，ここに相関の論理と包摂の論理とが重なり合う．主語と述語とを結ぶ繋辞の働きは，意識の能動的な綜合であり，類似や近接という相関的な関係性の中から或る特性が述語として選ばれ，それが主語の位置にある前述語的に形成された直観的対象に対して，それを規定するものとして述定される．対象を「～として」規定する意識の働きの背後には，単なる相関の論理を超えた包摂の論理が存する．

c　概念の自同性

一方，ヘーゲルは，『エンチュクロペディー』(1817年，1830年［第3版］)に収められた『論理学 Die Wissenschaft der Logik』，いわゆる『小論理学』において，「概念」の自己同一性について以下のように述べている．「概念そのものは，普遍，特殊，個別という三つの契機を含んでいる．普遍性 Allgemeinheit は，規定性における自己自身との自由な相等性である．特殊性 Besonderheit は，そこにおいて普遍が曇りなく自己自身と等しくとどまっている規定性である．個別性 Einzelnheit は，普遍性と特殊性という規定性の自己反転［反省］であり，こうした自己との否定的統一は，即自かつ対自的に規定されたものであると同時に自己同一的すなわち普遍的なものである」(『小論理学』§163, *Hegel Werke*, Bd. 8, S. 311[16])．そして，「概念」が主語と述語の位置に分かれた「判断」における同一性について，個が主語，普遍が述語である命題を例として，以下のように述べる．「個別は普遍であるという抽象的判断において，主語は，否定的に自己に関係するものとして，直接に具体的なものであり，これに対して述語は，抽象的な，無規定的に普遍的なものである．しかし，これらは〈である ist〉［繋辞］によって連関しているが故に，述語も，その普遍性の内に主語の規定性を含んでいなければならず，したがって，この規定性は特殊性であ

り，これは主語と述語との定立された同一性である」（§169, S. 319f.）．このように，普遍，特殊，個別は，三者の弁証法的な関係において，組み合わせを変えながら，それぞれが他の二者の媒介項の役割を果たしていく．

さらに，このような主語と述語との同一性は，相互的な包摂性として説明される．「主語は，自己自身に対する否定的関係として，確固たる基盤であり，そこにおいて述語が存立し，観念的に存在している（述語は主語に内属する）．一般に主語は直接に具体的なものであるが故に，述語の特定の内容は主語の多くの規定性の一つに過ぎず，主語は述語より豊かで広い」（『小論理学』§170, S. 320）．「逆に，述語は，普遍的なものとして，対自的に［それ自体で］存在し，それに対する主語が存在するかどうかは無関係である．述語は，主語を超えて進み，主語を自己のもとに包摂し，主語よりも広い．述語の特定の内容のみが両者の同一性を構成する」（S. 321）．フッサールにおいては主語対象を「～として」規定する意識主体による能動的な働きとされた「繋辞」が，ヘーゲルにおいては主語と述語とが相互的に包摂される結節点となる．フッサールにおける意識の現象学は，認識の発生的な過程を心理的な現象として記述する限りは，直観的な構成と概念的な把握との絡まり合い，重なり合いを指摘するのみで，認識が現実的に成立する時間的な意識の過程を超越することはできない．したがって，それによっては無時間的な論理を基礎づけることはできず，心理と論理との対立あるいは懸隔は解消されない．しかし，認識における心理と論理との対立は，はたして，ヘーゲルのように時間を内包する絶対精神の自己展開として論理が心理を包摂する形でしか解消され得ないのであろうか．

3.3　像と意味の弁証法――意識の超越的反転

a　像と意味

フッサールの場合，心理的な意識の働きが論理的な思考へと発展する

「発生的現象学」が最晩年の思索の形態を示すものではあるが，それが必ずしも彼の現象学の到達点もしくは完成形態を意味するものではない．むしろ彼の独創性は，それに先立つ「超越論的・構成的現象学」の時期における「意識の志向性」を主題とした研究にあるように思われる．そこで，以下では，『論理学研究』および『イデーン』に表された意識と対象との志向的相関に関するフッサールの思想を手がかりとして，カントの「直観」と「概念」に代わる，「像」と「意味」との間に現れる心理と論理との関係について考察する．

フッサールは，『論理学研究 Logische Untersuchungen』I･II（1900/1901年，1913/1921年［第2版］）において，対象の同一性は「意味 Sinn」によって支えられていると主張する．同一の対象の「異なった感覚内容」は「〈同じ意味〉の内に統握，統覚されているのであり，この〈意味〉による統握 Auffassung こそが，まず第一に〈私にとっての対象の現存 Dasein〉を見出す体験性格ではなかろうか」（『論理学研究』第II巻第V研究 §14, *Gesammelte Schriften*, Bd. 3, S. 397[17]）．そして，「像 Bild」が有する意味作用について以下のように規定する．「像は類似 Ähnlichkeit によって事象に関係する」が，「像も，たとえば大理石の胸像のように，他の事物と同じく一個の事物であって」，「新しい統握様式がはじめてこれを像たらしめるのであり，もはや単に大理石でできた事物が現出 erscheinen しているだけではなく，同時に，この現出に基づいて一人の人物が像的に思念 meinen されるようになる」（VI §14, Bd. 4, S. 587）．「像化する verbildlichen 統握の働きによって，私たちは知覚現出の代わりに像現出を持つのであり，ここでは体験された諸感覚に基づいて像的に表象された対象（画像に基づくケンタウルス）が現出する．同時に理解されるのは，志向的対象との関係で表象（この対象への知覚的，想起的，想像的，模写的，表示的な志向）と呼ばれるものが，作用に実的 reell に属する諸感覚との関係では，統握，解釈，統覚と呼ばれることである」（V §14, Bd. 3, S. 399f.）．このよ

うに像が何ものかの像として「思念」されるためには，「体験」された対象を何らかの実在的な事物と捉える単なる「知覚」作用とは異なる「新しい統握様式」，すなわち，像を（何らかの観念的な対象を表示あるいは直観せしめる）「有意味 sinnvoll」なものとして思念する「解釈 Deutung」作用が必要となる．フッサールによれば，このような「表象」と「解釈」との相関における「意味による統握」こそが，像としての「対象」が意識に対して「何ものか」として存在することを可能ならしめている．

b　意識の相関と反転

『イデーン［純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想］Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie』　第Ⅰ巻（1913 年）において，フッサールは，志向的な意識のあり方，すなわち「意味付与 Sinngebung」を通じた意識と対象，ノエシスとノエマとの志向的な相関性について以下のように規定している．「いかなる志向的体験も，そのノエシス的契機によって，まさにノエシス的体験である．一つの〈意味〉，場合によっては多様な意味を含むこと，このような意味付与を基礎に，またそれと一体をなしてそれ以上の，意味付与によってまさに〈有意味〉になる仕事を遂行することが，志向的体験の本質である」（『イデーンⅠ』§88, *Gesammelte Schriften*, Bd. 5, S. 202[18]）．「いかなる場合にも，実的・ノエシス的内実の多様な与件には，それと相関的な〈ノエマ的内実〉あるいは端的に〈ノエマ〉における真に純粋な直観に呈示され得る与件の多様が対応している」（S. 203）．

ノエシスとノエマとの志向的相関は，先に見た「像化する統握」と「像現出」との相関でもあり，志向的に相関づけられた意識と対象との力動的関係において，「像的に表象された対象」が，「何であるか」を意味的に規定する対象志向的な意識の方向を逆転させる形で，「いかにあるか」を自ら表示する感性的・直観的な多様性を伴って，反転的に「現出」する[19]．

このような意識と対象との反転的な相関は，両者の次元の相違を前提としたものであって，意味と相関する像の現出は，概念による直観の把捉として単純に包摂関係において捉えることはできない．ここに相関性に基づく「意味」と包摂性に基づく「概念」との相違がある．これは，ヘーゲルが『精神の現象学』において行っているような感覚から悟性への意識の弁証法的な発展の過程として説明できるものでもない．確かにヘーゲルの弁証法は，相関と包摂とを連関づけ，相互的な否定性によって主観と客観とを綜合するものであるが，この綜合の働きは，あくまで概念の自同性に基づく精神の自己展開によるものである．一方，フッサールの理論が示唆するのは，志向的意識の力動的な働きに基づく像と意味との反転的相関であり，これは，ヘーゲルに言わせれば主客の対立に基づく反省哲学の段階にとどまるものであろう．しかし，そこには目的論的に規定された二重の否定的論理に基づく閉鎖的な構造は認められない．

c　反転的綜合

カントが『純粋理性批判』において試みた「ア・プリオリな綜合判断」の普遍的な基礎づけが，直観を概念に包摂せしめることの困難さの故に，認識の及ぶ範囲を「現象」の世界に限定せざるを得なかったように，感性的なものと論理的なものとを，前者を後者に包摂せしめる形で綜合することはほとんど不可能なように思われる．それは，心理と論理との関係についても，相互に包摂もしくは還元せしめることが不可能であることにおいては同様である．しかし，「像」と「意味」との関係は，直観と概念，感性的なものと論理的なものとの関係とは異なっている．何故なら，「意味 signification」は，『論理学研究』におけるフッサールが規定したような「イデア的スペチエス」ではなく，現実的・歴史的な世界における「意味するもの signifiant」と「意味されるもの signifié」との相互的な関係性を示すものであって，それによって相互に関係づけられるものは，新たな関

係性（意味連関）のために時間的・歴史的に開かれている．これは，「把捉する begreifen」に由来する「概念 Begriff」による包摂作用が本質的に閉鎖的であるのと対照的である．

志向的意識に基づいて反転的に相関づけられた「像」と「意味」との関係は，像としての直観的・感性的統一と意味としての概念的・論理的統一という二様の統一の関係であり，両者はともにそれぞれ方向を異にする形で「多様における統一」という性格を有している．すなわち，両者の関係は，「連合」意識に基づく前述語的な「統一の多様」と「統覚」意識に基づく述語的な「多様の統一」との関係として捉えることができる．統一の多様としての像と多様の統一としての意味は，主語と述語の関係として相関づけられるが，両者は，ヘーゲルによる概念の弁証法のように繋辞を介した主語と述語との反転的な同一性に基づいて相互的に包摂されることはない．像と意味とは，感性的なものと論理的なもの，時間的なものと無時間的なものとの間を往還する意識の自己超越性に基づいて，継起的・交代的に相関づけられる．像が意味を持つことによって，生成変化するものとして表象される主語的対象が現実的・歴史的な世界の中で述語的に規定されるのであり，それによって主語的対象の時間性が充実され，無時間的なものが時間的なものの中に顕現するところの歴史性へと高められる．この場合，像としての主語と意味としての述語とを結ぶ繋辞は，相互包摂的に自らを閉ざす無時間的・論理的な結節点ではなく，そこにおいて時間的な意識が意味の連関を介して無時間的な論理へと自己超克的に反転するべく，歴史的に開かれた転換点となる．

結　心理と論理の反転的綜合――解釈を内包する美学

ロックとヒューム，カントとリップス，フッサールとヘーゲルの思想を対比しつつ近代の認識論の歴史を振り返りながら，心理と論理，感性的なものと論理的なものとの錯綜した関係について，観念の生成と相関の論

理，意識の統覚作用と包摂の論理，対象の論理的把握と反転の論理との関係を中心に検証してきた．これら三節にわたる議論は認識論の展開に即したものではあるが，それは同時に，認識論に類比的な学（劣等的認識論）として規定された美学のあり方を陰画的に映し出すものでもある．西洋近代において認識論と対をなす形で生成した美学は，認識論が心理と論理とに跨がるものとして展開してきたのに対応して，「美意識の心理学」であると同時に「感性の論理学」として，認識とは方向を異にする形ではあるが，やはり心理と論理とに跨がる学として規定されてきた．むしろ美学には，芸術美の現象が示しているように，その越境的もしくは混成的なあり方において，心理と論理との関係がいっそう錯綜した形で反映されている．そこで，以下では，心理と論理とに跨がる学としての美学を，従来は明確に指摘されることのなかった美的経験が対象の解釈を内包するあり方において捉え，認識論との対比のもとに生まれた近代美学の理念を実現する一つの形態であるところの「（対象の）解釈を内包する美学」の可能性について総括的に考察する．すなわち，三節にわたる考察を通じて明らかになった情動から信念へと連なる意識の重層性，「多様の統一」と「統一の多様」に見られる意識の統一性，意味付与と対象現出とを繋ぐ意識の反転性，このような意識一般に見られる働きを美的経験ならびに作品解釈に即して捉え直し，それぞれの特徴を，広義の「解釈」に認められる三位相，情動と観念に跨がる「印象解釈」，理解と表現を通じた「上演［演奏］解釈」，像と意味とを結ぶ「象徴解釈」としてまとめ，解釈を内包する美学における心理と論理の反転的綜合のあり方を簡潔に呈示する[20]．

a　印象解釈――情動と観念（美意識の重層性）

ロックの「観念」は「心象（表象）」「思念（概念）」「種概念（形相）」といった「知性」や「思考」の対象となるもののすべてを含む曖昧なものであった．一方，ヒュームにおいては，ロックの知性に定位した認識研究

に比してより総合的な彼の人間観を背景として，観念が，「連合」に基づく生成過程に対する考察を含みながら，情動・印象・信念に跨がる意識の重層性において捉えられている．しかし，ヒュームが指摘する意識の重層性も，印象–観念–信念，情動–観念–想像の間で錯綜した関係を示しており，やはり論理的な曖昧さを伴っている．とは言え，このような意識の重層性は，客観的な対象認識とは区別される美意識の現象における主観的な情動性に基づく「印象解釈」のあり方を示唆している．印象に基づく対象解釈は，「外なるもの」を「内なるもの」へと反転的に相関づけ，対象の観念を情動性を伴う生き生きとした印象として捉えることである．さらに，ヒュームの印象と観念の規定は，印象–観念–言語の連関に基づいて，言語を観念に，観念を印象へと還元する解釈，すなわち言語が示す観念を印象の活発さ，生動性を伴って捉える美的解釈を基礎づけるものとなる．認識あるいは論理的な思考によってそれぞれに分断された「印象–観念–言語」の連関と「情動–観念–想像」の連関とが再び結び合わされるのが，印象解釈としての芸術経験である．意識の重層性に基づいて情動に裏打ちされた観念（表象）を印象として解釈する，このような印象解釈を通じて，情動性に満ちた自己と対象との関係が情況（情動的状況）として了解される．意識の次元を異にする情動と観念とを反転的に綜合する印象解釈において，人間が，単なる精神的存在ではなく，「身体」を有する者として，対象との関係性の中に現存することが自覚される．

b　上演解釈――理解と表現（美意識の統一性）

カントは，意識の「統覚」作用に基づいて「直観」を「概念」へと包摂する行為として認識判断を規定している．このような認識判断の概念的・論理的な意識の統一に対して，リップスの感情移入は，表象作用に即した意識の直観的・感性的な統一とみなすことができる．概念的な統一は包摂性に基づく「多様の統一」として，直観的な統一は相関性に基づく「統一

の多様」として，現実的な対象の「多様における統一」を可能ならしめる意識の統一性の二面的なあり方を示している．このような「多様の統一」と「統一の多様」は，芸術における「理解」と「表現」に対応し，両者は，対象化された現象に対する解釈の二面，すなわち「意味解釈」と「上演［演奏］解釈」に相当する．いわゆる「上演芸術」において，対象の意味解明としての理解と対象の現象化としての表現は，理解すべき対象を表現を通じて解釈する上演もしくは演奏において綜合される．すなわち，対象の多様性を統合する意識の統一性に基づいて，互いに意識の方向を異にする理解と表現とが，現実的な「出来事」としての上演［演奏］解釈を通じて反転的に綜合される．しかし，このような概念的に理解することと直観的に表現することとを結ぶものとしての解釈は，上演芸術に限らず，すべての芸術作品の現実化，すなわち絵画の鑑賞，文芸の読解においても認められる．「多様の統一」と「統一の多様」との綜合は，作品の理解として統一へと向かう意味解釈が鑑賞者それぞれの想像作用（内的表現）を通じて多様に現実化されることにおいて，いわゆる上演芸術に限らず，芸術経験一般が有する上演性，出来事としての性格を示している．

c　象徴解釈――像と意味（美意識の反転性）

フッサールの中期思想を特徴づける志向的な意識によって相関づけられる「像」と「意味」との関係は，概念の自同性による閉ざされたヘーゲルの弁証法との対比において，意識の反転性に基づく開かれた弁証法として捉えられる．このような意識の反転性に基づく像と意味との綜合は，対象を「意味＝像 Sinn-bild」すなわち「象徴 symbol」として解釈することを要求する[21]．像を「有意味」なものとして見ることが広義の「象徴解釈」である．しかし，そもそも像と意味とは同次元的な意識のレベルにおいては現出しないものであり，像を有意味なものと見るためには意識の切り換え，直観的・実体的な対象性から概念的・関係的な意味性への転換を必要

とする．さらに，「象徴」を，そのギリシア語の原義における「割符 symbolon」（有意味的な事物の断片）として，不在のものとの関係において解釈することによって，意味的関係性（意味連関）の「開かれた」地平としての「世界」の存在が意識される．意味を有する像としての象徴の解釈は，「図」としての像を，概念の包摂性においてではなく，意味の開かれた相関性において，互いに「類似」もしくは「近接」するものの「代表 representative」として解釈することである．このように，意識の自己超越的な運動を通じて，特定の対象を像と意味との反転的綜合に基づく象徴＝代表と捉えることにより，意味あるものとしてのすべての存在者の連関を支える地平として世界が現出する．個々の存在者を意味連関の地平としての世界を背景として象徴として解釈することは，実在的な像の存在を通じた人間の身体性と観念的な意味の存在を通じた人間の歴史性を両契機として，個々の存在者が現象化する世界を，時間的なものと無時間的なもの，あるいは感性的なものと論理的なものとが交錯する動的で重層的な出来事として了解することになる．

以上のように，美意識の重層性に基づいて情動と観念とを連結する「印象解釈」，美意識の統一性に基づいて理解と表現とを綜合する「上演解釈」，美意識の反転性に基づいて像と意味とを接合する「象徴解釈」の三位相に即して「解釈を内包する美学」のあり方を総括的に呈示した．このような広義の解釈作用を美意識が伴うことが認められるならば，近代哲学において感性の論理学（感性論）であると同時に美意識の心理学（美意識論）と規定されてきた美学は，意識と対象とが交錯する超越論的構造において，観念のみならず情動をも「意味」として伴う「像」を，その表現性において理解するところの「解釈を内包する美学」であると新たに規定されるべきと結論づけられる．そして，このような意味での美学は，単なる「心理」にも「論理」にも還元されることなく，意識の自己超越的な運動を通

じて，同次元的には相関することのない「感性的なもの」と「論理的なもの」とを反転的に媒介するものとして，心理と論理の「間」に超越論的に位置づけられる．美意識の重層性，統一性，反転性に基づく広義の解釈は，単なる対象理解や言語行為には還元されることなく，主客の相関における対象解釈を通じて，内観的に自己の身体を，外観的に他者を含む世界をともに解釈する自己超越的な行為となる．これによって，美学は，単なる美意識の心理学ならび感性の論理学を超えて，対象認識を包越した自己の身体と事物の世界を，情動性に裏打ちされたの意味連関の地平において意識の内外が交錯する出来事として解釈するものとなる．

註

[1] 書名の後の数字は，それぞれ巻 book・章 chapter・節 section を指す．引用は，2巻本の John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*. In two volumes. Edited with an introduction by John W. Yolton, Everyman's Library, London, New York, 1961 により，巻数の後に頁数を記す．

[2] 書名の後の数字は，それぞれ巻 book・部 part・節 section を指す．引用は，David Hume, *A Treatise of Human Nature*. Oxford Philosophical Texts. Edited by David Fate Norton and Mary J. Norton, Oxford University Press, 2000 による．

[3] 連合心理学の展開については，Howard C. Warren, *A History of the Association Psychology*, Charles Scribner's Sons, New York/Chicago/Boston, 1920 を参照．

[4] 連合心理学におけるベインの位置については，前註にあげた Warren の著作，および，"Association of Ideas," in Chisholm, Hugh, ed. *Encyclopædia Britannica*（11th ed.）. Cambridge University Press, 1911 を参照．

[5] ヤコブソンの論文〈言語の二つの面と失語症の二つのタイプ〉からの引用（要約）は，R・ヤーコブソン『一般言語学（Essais de linguistique générale)』（川本茂雄監修，田村・村崎他訳）みすず書房，1973年によるが，主要な概念の訳語について統一を図るために，一部改めさせていただいた．

[6] 引用は，Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. In zwei Bänden. Herausgegeben von Wilhelm Weischedel, Suhrkamp, Frankfurt am Main 1974 によるが，頁数の指示は第2版（1787年版）による．

[7]「時間規定」としての「カテゴリーの図式」について，カントは，以下のように規定している．「量 Größe の図式としては対象の継起的覚知における時間それ自体の産出（綜合）を，質 Qualität の図式としては感覚（知覚）と時間表象との綜合あるいは時間の充実を，関係 Relation の図式としてはすべての時間における（すなわち，時間規定の或る規則に従う）知覚相互の関係を，そして様相 Modalität とそのカテゴリーの図式としては対象が時間に属するか，またどのように属するかという対象の規定の相関者としての時間それ自体を含み，また表している」（『純粋理性批判』S. 184）．「だからこれらの諸図式は，規則に従うア・プリオリな時間規定以外の何ものでもないのであって，またこれらの時間規定は，カテゴリーの秩序に従って，すべての可能的対象に関する時間系列 Zeitreihe，時間内容 Zeitinhalt，時間秩序 Zeitordnung，時間把捉 Zeitbegriff となる」（同 S. 184f.）．

[8] カントによれば，「判断」によって示されるのは「客観的に妥当する関係」であり，それは「同じ表象の関係でありながら主観的妥当性しかもたない，例えば，連合［連想］の法則に従うような関係から，はっきりと区別される．連合法則に従うならば，私が物体を手にもってみると，私は重さの圧力を感じる（Wenn ich einen Körper trage, so fühle ich einen Druck der Schwere），とのみ言い得るだけであろう．その物体は重さをもつものである（er, der Körper, ist schwer），と言うことはできない」（『純粋理性批判』S. 142）．

[9] リップスの「感情移入美学」については，拙稿「阿部次郎と感情移入美学」（三田哲学会編『哲学』第 113 集（2005 年）［2005 年 3 月］所収（pp. 93–130））を参照．

[10] 引用は，Theodor Lipps, *Leifaden der Psychologie*, Wilhelm Engelmann, Leipzig 1909［3rd］による．

[11] リップスによれば，「感情移入」には以下のような種類がある．「一般的統覚的感情移入」「情調［気分］移入 Stimmungseinfühlung」「（因果法則などの）経験的要素によって制約された感情移入 erfahrungsgemäße Einfühlung」「自然への感情移入 Natureinfühlung」「人間の感覚的現象に対する感情移入」「言語（を介した感情移入）」「認識の源泉としての感情移入」「美的感情移入」「実践的感情移入」（『心理学原論』第 13 章，1909 年［第 3 版］参照）．

[12]「通相分化の原理」については『美学』第 I 部第 1 篇第 3 章，「君主制的従属の原理」については第 I 部第 1 篇第 4 章に説明がある．

[13] 引用は，Immanuel Kant, *Kritik der Urtelskraft*. Herausgegeben von Wilhelm Weischedel, Suhrkamp, Frankfurt am Main 1974 によるが，頁数は 1790 年版による．

[14] 引用は，Edmund Husserl, *Erfahrung und Urteil; Untersuchungen zur Genealogie der Logik*. Redigiert und herausgegeben von Ludwig Landgrebe. Philosophische Bibliothek Bd. 280, Felix Meiner, Hamburg 1972 による．

[15] 引用は，Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Die Phänomenologie des Geistes*. G. W. F. Hegel Werke, Bd. 3, Suhrkamp, Frankfurt am Main 1986 による．

[16] 引用は，Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*. Erster Teil: Die Wissenschaft der Logik. G. W.F. Hegel Werke, Bd. 8, Suhrkamp, Frankfurt am Main 1986 による．

[17] 引用は，Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen*. I, II. Gesammelte Schriften, Bde. 2–4, Felix Meiner, Hamburg 1992 による．

[18] 引用は，Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. *I*. Gesammelte Schriften, Bd. 5, Felix Meiner, Hamburg 1992 による．

[19] 意識における「相関」と「反転」については，拙稿「相関と反転――文の構造と意識の運動に即した場所的論理の解明」(『西田哲学会年報』第5号［2008年7月］所収（pp. 1–20)）を参照.

[20] 美学と解釈学との関係については，拙稿「存在了解としての体験と解釈――美学と解釈学との対立を超えて」(三田哲学会編『自省する――人文・社会科学のアクチュアリティー』慶應義塾大学出版会［2011年4月］所収（pp. 201–226)）を参照.

[21]「意味＝像 Sinn-bild」としての「象徴」については，拙稿「芸術経験における〈自己＝意味＝像〉としての象徴の生成」(美学会編『美学』234号（2009夏）［2009年6月］所収（pp. 16–29)），および，“The Interlacement of Being and Meaning in Aesthetic Experience: the genesis of the self-signifying image through an associative and empathic understanding of artwork,” in *Corners of the Mind: Classical Traditions, East and West*, edited by Neil B. McLynn, Sumio Nakagawa, Taro Nishimura, Keio University Press, 2007（pp. 199–211）を参照.